

11月7日、中部電力浜岡原発一号炉で起きた事故は、幸い外部への放射能漏れがなかったものの、工学的には原発安全上の大事件である。何故なら、地震などで配管がこわれ、炉心の水が失われれば、原子炉の空焚きによる「炉心溶融」につながるため、最後の手段として用意されている「緊急炉心冷却装置」（以下 ECCS）自体が配管破断により機能しなくなった、という事故だからである。その上、この事故の検査の中で、10日新たに压力容器と制御棒駆動機構の溶接部のひび割れによる、炉水もれが見つかった。東海地震が今にもありそう、という状況でのこの事故は、地震による原発大事故というシナリオが誇張ではなく現実性のあることを示した。

「緊急炉心冷却装置」のポンプは、事故や落雷で原発が緊急停止して発電が止まったり、外部からの送電が切れても良いように、モーターではなく原子炉で発生中の高温蒸気でまわすタービンが使われている。つまり、最悪の場合に備えて、すべて自前でまかなえるようになっているのである。このポンプは、いつ事故が起こっても対応出来るように、毎月1回、故障していないかどうか手動でテストが行われていた。今回も、先月同様係員は蒸気を通すためのバルブを開けるスイッチを入れたはずである。時間は夕方の17時2分だった。その瞬間、あちこちで火災報知器が鳴り、ECCSは止まった。ECCSは一分も動かなかった。肝心の蒸気配管が破断し蒸気が漏れたのである。火災報知器は破断した配管から漏れた高温の蒸気で作動した。しかも、この時、原子炉からの水漏れも始ま

っていたのである。もし、压力容器のひび割れが拡大し本当に炉水が失われても、緊急炉心冷却装置は働かなかったのである。そうなればそのまま最悪の「メルトダウン：炉心溶融」に進んだはずである。数十分～2時間後くらいには、チェルノブイリを上回る災害に日本は見まわられていただろう。富士山の噴火のように放射能が撒き散らされる様子は想像するだけでも背筋が寒くなる。我々とチェルノブイリの間には紙一重の差しかなかったのだ。

破断した配管は直径15センチ、厚さが1センチの炭素鋼である。こんな頑丈なパイプの瞬時破断は考えられない。破断前に何らかの前兆があったはずだが、定期点検の対象にはなっていなかった。また、88年にこの原子炉では、今回とそっくりの炉水漏れ事故を起こしたがその教訓は生かされなかった。

浜岡原発一号炉は1976年運転開始以来、88年に再循環ポンプ2台同時停止、压力容器の溶接部ひび割れによる漏水、90年には燃料棒大量破損による外部への放射能漏れなど、たびたび事故にみまわれている。老朽化による事故はこれからますます増加する。政府や電力会社は、新規立地の困難から、既存原発の寿命延長を計画しているがそれは危険な賭けである。

21世紀は燃料電池や、バイオガス、風力発電など小規模分散型、資源再生型電源の時代である。大事故が発生する前に、一刻も早く危険な老朽原発の廃炉と脱原発・新エネルギーへの道に踏み出すべきである。

（河田昌東）

